

ある。

帰国は大正十三年六月二十三日で、直ちに復職し、その後昭和三年六月に教授に昇格。同七年四月に図画師範科から西洋画科へ転じて同十九年六月まで在職する。

② 中村勝治郎の死去

中村勝治郎（第一巻331頁参照）は黒田清輝の推輓により明治三十年五月本校雇となり、同三十八年十二月助教に昇格、西洋画科授業および塑造部木炭画指導を担当した。画家としては白馬会によく出品した外は、第四回内国勸業博覧会、関西美術会第一回展、セントルイス万国博覧会、第二、三、七回文展、美術新報主催第三回展、国民美術協会第一回西部展などに自然の写生を旨とする温和な作品を発表したが、活動は極めて地味であったと言える。

中村は大正八年十二月七日に脳卒中に陥った（同九年四月作成「俸給半減同」には同九年一月八日以後欠勤とある）。親友の黒田清輝はその八日後にこれを聞き、直ちにお抱え医師を連れて訪れたが、日記に「殊ニ氣ノ毒ナルハ精神状態ナリ」と記しているように、中村の病状は悲惨であった。そのため黒田は同九年一月に麻布笄町の別邸内にあった小さな家に家族もろとも中村を移り住ませ、療養にあたらせるとともに、自分も夫人を連れて時折り見舞った。中村は具合の良い時には家人に伴われて宏大な庭園を散歩したり、庭の片隅にあったバーナード・リーチの窯場や画商仲夫妻などを訪れたりした。しかし、全快の見込みは薄かったので、黒田は正木直彦と相談して優遇退職の措置をとり、その結果、中村は同十年

一月に休職を命ぜられた（翌十一年一月満期退官）。その後、中村の死を予期した家族は北豊島郡高田町大字旭出五十五番地に家を購って引移り、ここで中村は同十一年二月四日に死去した。葬儀は二月八日に芝の青松寺で挙行された。

中村の死後、中村と黒田の共通の友人である弁護士町井鉄之助は遺族のために裁判所内で中村の遺作展を開き、五、六十点を展示したという。黒田の日記に「夕刻一時間許中村君ノ未成肖像畫ニ補筆ス」（大正九年八月十四日）、「中村君ノ菊花圖ノ破損ヲ繕ス」（同十年二月八日）などとあるのは、この展覧会のためであったのかも知れない。黒田も中村より二年余り後に笄町の邸内で死去する。

③ 黒田清輝の帝国美術院長就任

大正十一年七月九日、帝国美術院長の森鷗外が死去したため、同月二十一日に黒田清輝が新院長に就任した。帝室技芸員、子爵の肩書を有する黒田は本校西洋画科教授の本務の傍ら宮内省御用掛をつとめ、また、官展や博覧会の審査委員を歴任しただけでなく種々の役職に就き、大正九年三月貴族院議員当選、同十年一月社会事業調査会委員に任命、同年七月臨時教育行政調査会委員に任命、同十一年十月教育評議会委員任命、同十二年十二月対支文化事業調査会委員に任命等々が示すように、煩雑な職務に追われ、作家生活が損われた。その状態のまま同十三年七月には死去する。種々の事情があったに違いないが、晩年を後世に残る一枚の絵にではなく俗事に費したことは惜しむべきことである。因みに『東京朝日新聞』（大正十一年六月六日）は懐中時計を見る忙し気な紳士黒田の写真とともに

に次のような記事を掲げている。

繪筆を棄て研究會の小使

此頃の低氣壓再來に盲滅法忙しがつて駆け廻る黒田子

繪筆を執つては藝術の殿堂を奥の院まで究めた第一流の洋畫家黒

田清輝氏も昨年^{〔一昨年〕}同族に推されて上院に議席を得てからは靜かなア

トリエでモデルと睨めつこするより天下國家の問題を提げて國政

に奔走することの方がお氣に召したものか、この程政界の中心に

低氣壓が発生して内閣總辭職か改造か暗雲低迷のこの頃〔高橋(是

清)内閣はこの六月六日総辭職〕は更にあの丸い軀^{からだ}を西に東に現して

忙しがつてゐる、きのふも朝から司法大臣官邸に出かけて筋向ふ

の高橋首相官邸の大臣會合の雲行や如何にと案じつゝ午後四時近

くまで奥の一室で祕書官と何事か密談を重ねて出かけて來た

『や、私しやけふ少し忙しいんだが……是から宮内省へ行つてお

寫眞の御用があるから宅へ歸るのは何時になるか判らんが兎も角

忙しい』と自動車のハンドルに手をかけながら『併し私は繪描き

が本職だけれど議員になつて見れば政治のことは國民として多少

なり盡力しなけりやならんと思つて、出來るだけお勤めはする積

りですよ、これまでだつて全然政治に興味を持たなくはなかつた

が何しろ本職が繪描きだもんでつひ縁が遠かつたんですね、政治

のことはまだ素人で私なぞは大した役目をするのではなく、私は

友人としてたゞ知人の所を訪ねると、研究會の方は謂はゞ小使

同様お使だけを勤める位のもですよ イヤ眞當^{ほんたう}に……、斯^こんな

譯で繪は今年になつて小さな物二つ三つ書いたゞけ、其外暇を見

ては頼まれた肖像など描いてゐますがなかなか運ばないでね
ッハ、夏になれば少し繪の方も描いて見度いと思つてゐるが、臨
時議會でもあればまた忙しくなるから厄介で……』と汗を拭くけ
れども研究會常務としての活躍は外から見れば餘り厄介らしい様
子には受取れなかつた

④ 『東京美術學校 近畿古美術案内』と修学旅行

大正十一年三月、標題の手引書が刊行された。同年五月発行の
『東京美術學校校友會月報』第二十一卷第一号には次のような広告
が掲載されている。

東京美術學校長 正木直彦先生序

東京美術學校教授 大村西崖先生閱

東京美術學校助教授 東京女子高等師範學校講師 田邊孝次氏著

東京美術學校 近畿古美術案内
修学旅行

四六半裁細長形、本文五號二百十頁、表紙木版四度刷、
定價金壹圓八拾錢
案内地圖附

本書は著者が東京美術學校に於て再三計畫したる近畿古美術實地
研究旅行の案内用として發行せられたるものにして、近畿の古社
寺約百三十に就き建築、繪畫、彫刻、工藝及由緒を簡明に繁簡度
に従ひ記述せるものなり、方今古美術研究の旺盛なる時、奈良、
京都地方に遊ばんとする人士の必ず一本を備ふ可きものなり、殊
に巻頭の案内地圖は重要な古美術の所在を明示し、巻尾の旅行
日程は旅行者の最良の參考たる可し 體裁優美にして然も携帶記